パネル B　　【SK101 教室】4 日（土）　10: 00～12: 00

20 世紀のラテンアメリカにおける創作と出版戦略
―アルゼンチン、ウルグアイ、メキシコの事例―

責任者：寺尾隆吉（早稲田大学）

○報告者
　寺尾隆吉（早稲田大学）
　「出版黎明期のアルゼンチンとホルヘ・ルイス・ボルヘスの創作活動」
　大西亮（法政大学）
　「文芸雑誌『スール』とラテンアメリカ文学」
　浜田和範（慶応義塾大学）
　「フェリスベルト・エルナンデスの受容に見るウルグアイ出版産業の展開」
　藤井健太朗（東京大学大学院）
　「20 世紀後半のメキシコにおける「世界文学ネットワーク」の展開とカルロス・フエンテス」
○討論者
　仁平ふくみ（京都産業大学）

寺尾報告要旨

20 世紀初頭から、文化的空白を埋めるため西欧文化の広範な吸収に乗り出したアルゼンチンでは、パルカル・カザノヴァの論じた文学資本の「所有」、さらには「横領」に沿う形で様々な西欧文学の翻訳・出版が進行した。ホルヘ・ルイス・ボルヘスが後に「不遜」(irreverencia)の言葉をあてたとおり、このプロセスには、剽窃、歪曲など様々な脱法的要素が伴っており、出版社や編集者はもちろん、ボルヘス自身も含め多くの作家が関わっている。一方で西欧文学を吸収しつつ、他方でその伝統を「不遜」に運用することで、出版社と足並みを揃えながら、アルゼンチンの作家たちは斬新な創作に到達することができた。名作短編小説「ピエール・メナール、『ドン・キホーテ』の作者」を例に、20 世紀前半のアルゼンチンにおける出版活動と創作活動の連関性について考察する。

大西報告要旨

ビクトリア・オカンポの強力なリーダーシップによって 1931 年に創刊された文芸雑誌『スール』は、ボルヘスをはじめとするアルゼンチンの作家たちに貴重な活躍の場を与えた。さらに、西欧文学の積極的な紹介を通じて、地域性にとらわれない普遍的な文学の基盤を同時代の作家たちに提供した。その 2 年後に設立されたスール出版も、ラテンアメリカ文学

のみならず、欧米文学のスペイン語訳の刊行を通じて、多くの文学者たちに創作上の刺激を与えつづけた。その活動の原動力となったのは、アメリカ大陸とヨーロッパを架橋する壮大な文化的ビジョンに裏打ちされたコスモポリタニズムである。これは、西欧文化圏のいわば「周縁」に位置するアルゼンチンの文化的優位性を体現するものといえるだろう。本報告では、20 世紀ラテンアメリカ文学のブームに先立つ時代に先駆的な役割を果たした雑誌『スール』およびスール出版の活動を多角的に検証することを目的とする。

浜田報告要旨

ウルグアイの作家フェリスベルト・エルナンデスの短篇集『誰もランプをつけていなかった』は、1947 年ブエノスアイレスの有力出版社スダメリカーナより刊行され、作家の名を国外に知らしめるきっかけとなった。とはいえこの著作は、ウルグアイ国内においては有力批評家エミール・ロドリゲス・モネガルに酷評を浴び、以降作家自身の発表した作品の少なさも相まって、国内におけるフェリスベルトの批評的受容は最晩年の 1960 年前後に至るまで進むことはなかった。本報告では、1947 年から 1960 年のあいだにフェリスベルトが寄稿した各種定期刊行物の特徴を分析し、そこにロドリゲス・モネガルをはじめとした文芸批評家の地勢図を読み込むことで、ウルグアイにおけるフェリスベルトの受容およびカノン化において出版産業の進展が果たした役割を明らかにする。

藤井報告要旨

1950 年代以降、メキシコでは、「半世紀の世代」と称される作家たちにより、従来のメキシコ文学を刷新する作品が多く発表された。この背景には、文芸誌の創刊、出版社の設立、その他の文学的制度(大学・奨学金・基金・文化施設・賞など)の拡充があった。また、ラテンアメリカ小説の「ブーム」として知られる現象を通じて、それらの作品は、メキシコ文学の枠組みを超え、ラテンアメリカ文学として、世界的に流通し受容された。本発表では、こうした一連の経緯において文芸誌が果たした役割に着目する。そして、ある文芸誌上で構築される、作家・作品テクスト間の国際的な関係、また、複数の文芸誌が時代・地域を超えて作家・テクストを介して構築する諸関係、および、それらをとりまく諸々の文学的制度を「世界文学ネットワーク」として位置付ける。その上で、「半世紀の世代」を代表する作家であり、1955 年に文芸誌 *Revista Mexicana de Literatura* を創刊し、また、パリを拠点とした文芸誌 *Mundo Nuevo* の中心的な寄稿者のひとりでもあった、カルロス・フエンテスのこれら一連の活動を追うことで、20 世紀後半のメキシコにおける「世界文学ネットワーク」の展開の諸相を明らかにする。